

韓国国立ソウル聾学校とのオンライン交流

～新型コロナウイルス感染症流行期中断を経て再開して～

館山 千絵・奈良 歩・数馬 梨恵子・澤頭 紀夫・荒川 郁朗・廣瀬 由美

本校中学部では 2014 年度より韓国国立ソウル聾学校との生徒同士によるオンライン交流を始め、2015 年度に 3 年間、2018 年度には 5 年間の国際交流協定を締結し交流を行ってきた。新型コロナウイルス感染症の世界的な流行の影響によりオンライン交流が 2 年間中断されたが、2022 年度、再開することができた。再開に際し、生徒が国際交流に対して非常に前向きな姿勢で取り組んだ様子を報告する。

キー・ワード：国際交流 オンライン交流 相互文化理解 グローバル化 新型コロナ

1 はじめに

本校中学部では 2013 年度より韓国国立ソウル聾学校（以下、ソウル聾学校）との教員間交流を開始し、翌 2014 年度からは生徒同士によるオンライン交流を始めた。2015 年度に 3 年間の国際交流協定を締結し、2018 年度にはソウル聾学校の教員、生徒が来校し、5 年間の協定締結の延長を行った。

その後、次の機会には本校生徒がソウル聾学校を訪問し直接交流することを念頭に本校教員がソウル聾学校を訪問し、打ち合わせを行った。しかし、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により直接交流のみならず、オンライン交流も実現できず、結果的に 2 年間、中断を余儀なくされた。

2023 年 5 月末に国際交流協定の期限を迎えるにあたり、2022 年度になり、交流の再開に向け、担当教員同士の電子メールによる打ち合わせが始まった。

従来は打ち合わせを英語で行っていることが多かったが、今回、両校とも担当者の変更になり、ソウル聾学校の担当者が英語教員ではなくなったため、打ち合わせは翻訳サイトを活用して、電子メールで行うこととし、双方とも原文と訳文（韓国語と日本語）を併記する形でメールのやり取りを行った。

2 オンライン交流の概要

コロナ禍による中断前のソウル聾学校との生徒間オンライン交流は、各年度 7 月に行われてきた第 1 回の交流では、内容が自己紹介や学校紹介等を行い、12 月の第 2 回の交流はオリンピック、学校生活、年

中行事など年度によってそれぞれ独自のテーマで進めていた。

いずれの交流も本校側は 1 年生が対応しており、入学後まもなく上級生から 1 年生に向け、前年度の交流の様子の報告や助言が行われ、交流の準備を行っていた。

2 年間の中断により、上級生から交流について引き継ぐことができなくなり、教員によるガイダンスで交流準備を開始することになった。

また、他学年からも交流の希望があり、今年度は 1 年生と 2 年生が第 1 回の交流に参加することになった。

3 第 1 回のオンライン交流の概要

(1) 事前準備

交流の準備は約 1 か月かけて行った（Table 1）。

各学級、学年での準備では、氏名のハングル表記のカード準備、ソウル聾学校から寄せられた質問への回答準備、代表挨拶の準備等を行った。

代表者の挨拶や質問への回答準備では、話す文章を日本語で考え、それを翻訳ソフトで韓国語に直し、韓国語が堪能な方に修正を依頼し、原文の日本語とともに事前にソウル聾学校に電子メールで送信した。ソウル聾学校からも同様に挨拶や質問への回答を事前に電子メールで送信してもらう形をとった。こうしておくことで万が一当日インターネット回線が不調になった場合でも内容を補足することができると考えた。

Table 1 スケジュール

	実施内容
6/10	オリエンテーション①（国際交流の目的、相手校概要と韓国について） [学年合同、高等部棟 1 階会議室]
	アンケート実施[学級ごと、各教室]
6/13、 6/16	オリエンテーション②（韓国語のしくみ、自己紹介表現） [各学級 1 時間、各教室]
各学級、学年で準備（各 2～3 時間）	
7/8	テスト通信
7/15	当日

(2) 事前アンケートの実施

交流の準備を始めるにあたり、オリエンテーション直後にアンケートを行った。

交流への期待を「とても楽しみ」「楽しみ」「あまり楽しみでない」「全然楽しみでない」の 4 件法で尋ねた結果は Table 2 の通りである。

Table 2 交流への期待

	中 1	中 2
とても楽しみ	5	7
楽しみ	6	5
あまり楽しみでない	3	1
全然楽しみでない	0	0

楽しみにしている理由としては、「韓国語を学びたい」、「外国の中学生との交流は初めて」、「韓国の学校がどんな様子か知りたい」、「韓国に行ったことがない」、「他国のろう者に会ったことがない」などがあった。

あまり楽しみではない理由としては、「韓国語が話せない」、「話を通じるか不安」、「人見知りだから」などがあった。楽しみにしている生徒の中にも「韓国語は話せないのが不安」という声があった。

これまで外国の方と交流の経験があるかどうかについては、ALT や外国からの参観者との短時間の交流等がほとんどで、同年代の外国の方と交流の経験

がある生徒はほとんどいなかった。

(3) 当日（7/15(金)2・3 校時）

① 会場

従来は中学部棟多目的室で行っていたが、今年度は生徒が 2 学年で 28 名と人数が多くなったため、生徒間の距離が十分確保できるよう、高等部棟 1 階会議室で行った。

② 流れと様子

交流の流れと内容は Table 3 の通りである。

例年の自己紹介では氏名と好きなものを話していたが、今回は生徒数が多かったため名前だけにした。

Table 3 交流の内容

1	開会
2	校長挨拶
3	生徒代表挨拶
4	生徒自己紹介
5	質疑応答
6	閉会

挨拶や質疑応答については事前に内容を電子メールでやりとりしていたので、韓国からの質問や回答は大型ディスプレイに表示できるようにした。

本校からの質問や回答はプリントアウトしたものをスケッチブックに貼って提示した。

(4) 生徒の感想

生徒からは以下のような感想があった。

- ・似ている手話が多かったので、話している内容が分かる時があった。
- ・同年代の外国の人と交流ができたのがうれしかった。
- ・お互いの学校のことを知ることができて勉強になった。
- ・ソウル聾学校のように看板のようなものを作ればよかった。

今回、人数の都合で参加することができなかった3年生の生徒からも「私たちも交流してみたかった」という声が多く聞かれた。

(5) 教員の感想、反省

参加した教員からは以下のような感想、反省が出された。

- ・オンライン交流の際の話し方についてももう少し生徒に指導する必要があった。スケッチブックの見せ方、見せる時間、向き、画面に入っているかの確認などを工夫するとより伝わりやすくなる。
- ・本校からの質問や回答の文について、日本語を小さく、韓国語に訳したものを大きく見えるようにプリントアウトして貼った方がより分かりやすく伝わったのではないかな。
- ・提示資料に写真を使うことで内容を伝えるのに非常に役立った。もっと写真を準備するとよかった。
- ・姓だけでもよいので氏名のカードをソウル聾学校のように常時身につけられるような形にすればよかった。
- ・交流の後半で予定にはなかった「ソウル」や「筑波」の手話の教え合いが始まり、交流が深まった。
- ・今回はソウル聾学校からの要望で Skype を使用したが、もし Zoom のグループ分け機能のようなものがあれば、小グループを作って話し合いができるとよかったかもしれない。
- ・翻訳アプリを活用することで、より自由なやり取りが可能になるかもしれない。

4 第2回のオンライン交流の概要

(1) 事前準備の内容

第2回のオンライン交流はお互いの国の文化や風習をテーマに質疑応答することになった。

1回目と同様、事前に質疑応答の内容を電子メールで相談し、回答の準備を行った。前回の反省を踏まえ、韓国語表記を大きくしたスケッチブックを準備した。

また、氏名のハングル表記を首からかけられるように準備した。

(2) 当日(12/7(水)2・3校時)

① 会場

第2回は生徒14名で従来並みになったが、生徒間の距離を十分に取れるよう、1回目と同じ会場を使用した。

② 交流の内容

交流の内容は Table 4 の通りである。

Table 4 交流の内容

1	開会
2	校長挨拶
3	生徒代表挨拶
4	質疑応答
5	手話の学習
6	集合写真撮影
7	閉会

当日は、開会に先立ち、ソウル聾学校の生徒の太鼓の演奏があった。

また、質疑応答の際に、伝統的な衣装を実際に着て見せてくれる場面やテコンドーの実演があり、驚嘆の声があがった。

手話の学習では「今日はとても楽しくて幸せでした。来年、また会いましょう」という文をお互いに表現し合って練習を行った。似ているところ、違っていているところを指摘しながら、和やかな雰囲気での学習することができた。

第2回は通常の数になったので、お互いディスプレイを背にして集合写真を撮ることができた。

(3) 生徒の感想

生徒からは以下のような感想があった。

- ・前回よりも実物や実演がたくさんあり、言葉だけで伝えるよりも分かりやすかった。
- ・伝統的な遊びでは、タクチチギ、コンギ遊び、チェギチェギ、トウホ（投壺）など日本のものと似ているところもあった。（めんこ、おはじき、蹴鞠、輪投げなどと似ている遊びがあった。）

52 韓国国立ソウル聾学校とのオンライン交流

- ・リアクションをもっとはっきりした方が、こちらが分かったかどうか相手に伝わるといった。
- ・韓国語が分からなくても、安心して交流できることを（後輩に）伝えたい。

以前、本校中学部教員がソウル聾学校を訪問した際にいただいた遊びの道具を用いて、今回紹介してもらった遊びを実際にやってみたところ、生徒達からは「実際にやってみたら楽しかった」という感想があがった。

(4) 教員の感想と反省

参加した教員からは以下のような感想、反省が出された。

- ・全体の様子を見せるためにカメラの向きを変えた際に逆光になってしまった。レイアウトを考える際に、横から光が入るようなレイアウトにしておいた方がよい。
- ・久しぶりの交流ということもあり、やや教員主導になってしまった。次回からはもっと生徒主体で自由度の高い交流ができるように工夫したい。
- ・今後に向けて、より自由で柔軟なコミュニケーションができるように翻訳アプリ等の活用について検討する必要がある。

5 まとめと今後の展望

2014 年度より行ってきたソウル聾学校とのオンライン交流が2年間途切れてしまい、担当教員との引継ぎが不十分な中での再開となったが、無事に2回の交流を行うことができ、次年度の交流協定延長に向け、大きな収穫があった。

次年度以降は上級生から1年生への引き継ぎも再開できるようになるため、生徒の国際交流活動に対する意識を高め、必要な知識やスキルを身に付けられるように支援していきたい。

〔謝辞〕

本研究で報告した取組には、ICT 支援員から多大なる御協力をいただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

- 有馬里佐・太田康子・西分貴徳・徐基弘(2017) 韓国国立ソウル聾学校との国際交流 ～3年間の取り組みを通して～. 筑波大学聴覚特別支援学校紀要. 39. 52-55
- 廣瀬由美・半沢康至・有馬里佐・徐基弘(2018) 韓国国立ソウル聾学校との国際交流 ～3年目第2回の交流を中心に～. 筑波大学聴覚特別支援学校紀要. 40. 34-36
- 廣瀬由美(2022) 韓国国立ソウル聾学校とのオンライン交流. 筑波大学附属学校教育局広報誌ポローニア. 55. 7
- 眞田里佐・佐坂佳晃(2015) 韓国国立ソウル聾学校訪問. 聴覚障害, 70(1), 66-65
- 眞田里佐・藤田正樹・徐基弘(2016) 韓国国立ソウル聾学校との国際交流. 筑波大学聴覚特別支援学校紀要. 38. 46-51